

修士論文要旨

真宗における社会福祉活動の一考察

——真宗の地域社会的実践について——

巽 一 仁

目 次

序 論

本 論

第1章 社会の現状と課題

第1節 社会の諸問題

第1項 人口の変化

第2項 生涯未婚率の上昇

第3項 世帯変化

第4項 雇用の状況

第2節 社会問題の認識

第1項 住職（坊守）の意識

第2項 門徒の意識

第2章 福祉の特徴

第1節 社会福祉の展開

第2節 仏教社会福祉

第3節 真宗社会福祉

第3章 真宗者による社会实践の可能性

第1節 社会实践の否定的ニュアンス

第2節 念仏者の生活

第4章 地域社会のニーズに応える浄土真宗の実践

第1節 和歌山台風災害支援

第2節 暮らしの学校・農楽の～ら

第3節 柏原市つどいの広場事業

親子広場ドレミファごんちゃん 安明寺ビハーラの家

第4節 お寺でデイサービス 還る家ともに

第5章 鶴見和子の内発的発展論という視点

結 論

序 論

本論文「真宗における社会福祉活動の一考察—真宗の地域社会的実践について—」は、浄土真宗本願寺派の寺院が取り組んでいる社会福祉活動を研究テーマに取り上げ、社会福祉の歴史と、寺院活動の更なる可能性を明らかにした研究論文である。

本論文では、現代社会の諸問題に対して浄土真宗本願寺派がいかにしてその使命を果たしているのかという課題に応えるため、まず社会の諸問題の実相を明らかにしたうえで、浄土真宗本願寺派の歴史や思想と信仰の新しい可能性を探ると共に、社会福祉を参考に考察した。

本 論

第1章

浄土真宗本願寺派における社会福祉活動について論じる前提として第1章において、寺院をとりまく社会問題について論じた。浄土真宗本願寺派の寺院が地域の社会活動に何らかの関わりを持つことが出来るならば、今後の寺院のあり方を明確に示すことが出来る。しかしその為には、社会と共に生活している人達の諸問題を、寺院に関わる者は把握しておかなければならない。今回は、政府が提供するデータをもとに「人口の変化」「生涯未婚率の上昇」「世帯変化」「雇用の状況」という問題を確認し、浄土真宗の寺院・住職や門徒を取り巻く環境も同じ諸問題を抱えていることを第9回宗勢基本調査報告書をもとにまとめた。

日本の社会保障は、地域コミュニティが多岐にわたって支えており、社会の保障が低いからと言って福祉が薄いとは決して言えず、それほど住みにくい社会ではなかった。しかし社会情勢が変化したことで、日本独自の助け合いが無くなり、不安で住みにくい社会へと変わっていったのである。浄土真宗本願寺派の僧侶や門徒も社会の諸問題に関心を持っている。また浄土真宗本願寺派に対しては人々の苦悩に応える教団である為に、時代に対応する教学を確立し、寺院の活性化が求められているのである。

第2章

第1章で現代に生きる私達は多様な問題を抱えながら生きている事を確認したが、社会的な諸問題に対して現在の社会福祉、仏教界、さらに浄土真宗本願寺派はどのような対応をとってきたのかという検討を行った。

日本の社会福祉は、地域社会環境が悪くなり住みづらい社会へと移り変わっていくと同時に、社会福祉も全ての国民を救うという理念のもと、現代の問題に対応するものとして改正され、

より多様化する個人の「生活の質」を落とすことなく、豊かな生活を支えようとしているのである。日本の社会福祉の歴史には仏教者による社会福祉の影響が大きく反映しており、多方面にわたって貢献してきた。福祉の場面で先駆性・自発性・独自性をもった活動をする為の基盤が備わっているのだが、仏教社会福祉の概念規定が曖昧である現在において、概念を一本化するためにも更なる研究の追求と実践の積み重ねが求められている。浄土真宗本願寺派の社会福祉活動もまだまだ発展途上であり、社会問題に対して重い腰を上げ対策を講じてきた歴史はごく短いものである。またその概念も定まっておらず、社会福祉の受け止め方は人それぞれである。それでも浄土真宗本願寺派の社会福祉活動は、行政のサービスが及ばず苦しんでいる方達がいることを社会的に認知させる為の活動として、自発的・先駆的に取り組むことが重要であった。

第3章

第3章では多様な活動を行っている浄土真宗本願寺派の僧侶による社会実践の可能性について論じた。

浄土真宗本願寺派の僧侶による社会に対して、その活動を『歎異抄』の第4章や『恵信尼消息』の第3通を用いて批判する意見は多数存在する。また親鸞自身も積極的な社会に対する貢献については直接的に言及しておらず、著書に残されていない。確かに親鸞は阿弥陀如来の本願力以外に救われていく道はないと示し、自力の心の深さを知らされると共に、ただ寄り添うことしかできないその中で、お念仏を頂いているのである。それは、決して衆生利益を放棄したのではなく、ただ衆生利益は如来のはたらきであることを明確に示したのである。それは、単に社会活動を否定したものではなく、末通っていないけれど、何かしないではいけないという気持ちは今も昔も重要なことであった。親鸞は「他利利他の深義」という言葉を使い『教行信証』『証文類』を締めくくっているが、この言葉にこそ社会活動の可能性が秘められていると推測する。親鸞は、自力を否定し、あくまで阿弥陀如来の計らいによってのみ仏道を歩むことができる仏弟子であると示している。親鸞のみ教えに出会い仏道を歩む私達には、自らの煩惱による深い悲嘆と、救われる喜びが入り交じっているのである。つまり社会的活動が慚愧と歓喜の報恩感謝の活動だとすると、返しても返しきれない仏恩に報いるものなのであるから、これでよいという完成はなく、無限に活動が続いていくことにもなるのである。それこそ浄土真宗本願寺派の社会活動であると言う事が出来ると思われる。時代が移り変わろうとも、お念仏を主としながら、お互いを助け合う同朋意識が教団の中に脈々と流れており、その法が伝わってきた背景にはすでに社会的性格が備わっていたと考えられるのである。

第4章

第4章においては「地域社会のニーズに応える浄土真宗本願寺派の実践」として、「被災者」「社会不適合者」「子ども」「母親」「高齢者」というキーワードを中心に支援活動に力を入れ、成果を上げている寺院として4ヶ寺の事例を調査、分析した。1つ目は奈良や和歌山を中心として発生した台風12号の被災地で活動されていた正念寺の住職に、聞き取り調査とボランティアとして活動された現地支援を中心に調査し、分析を行った。2つ目は生きにくさを抱える若者達を集めて、農業訓練などを行いながら自立支援サポートや地域との関わりを築く社会活動を、勝林寺がNPOとして行っている『暮らしの学校・農楽の〜ら』の職員への聞き取りを、作業の手伝いをしながら調査し、分析を行った。3つ目は「親子広場ドレミファごんちゃん／安明寺ビハーラの家」という柏原市在住の0歳から就園前の乳幼児と保護者・親子10組程度を対象に、安心して子育てができるように支援を行っている安明寺において、住職や坊主、職員への聞き取りを中心に調査し、分析を行った。4つ目はお寺のデイケアサービスである「還る家ともに」という福祉活動を行っている善了寺において、住職や職員への聞き取りを、ボランティア活動を実施しながら調査し、分析を行った。

第5章

第5章において、浄土真宗本願寺派の社会活動について、内発的發展という考え方を参考に、今後の地域との関わりについて考察した。

現代社会において外発的な發展を目指す主従的な関わりは、ある程度の成果をもたらすが、一部では恩恵を全く受けられないという問題が生じている。その点、内発的發展論はその地域に住む住民や諸問題に直面している個人がキーパーソンとなり、福祉活動の發展を願うと共に、その地域そのものの發展に関わっていける。つまり浄土真宗本願寺派の僧侶が地域と関わる場合、人間の無限の欲望の増殖を目的とした發展は当然否定しつつ、地域の諸問題によって生きづらいと思う人達に、寄り添い共に生きていくという姿勢で、地域の社会的發展に貢献していくことが考えられるのである。宗教的活動に触れ合った人達は、助けられたということよりも、自らのこころに宗教的な萌芽が各個人の中で芽生えてくるのである。そうすると内発的に變化が起こり、自らが主体となってまた地域社会の諸問題へと関わっていけるのである。阿弥陀如来の救いに気付いた人達が、自らの不完全さから目を背けることなく、今の自分が出来ることを、出来る限りすることが可能になってくるのである。

結 論

本論文を通して、浄土真宗の僧侶がいかにして社会に対してその使命を果たしうるかを検討した。私達は織物のように、1人1人の縦糸が地縁・血縁・社縁といった横糸で繋がれ社会を形成している。しかし今の社会では横の繋がりが希薄になってしまった為、個人の諸問題に向き合い共に考えてくれる人があまりにも少ないのである。その中で僧侶は地域住民の生活の中で細かいところに手が届く存在である。より現場に密着して実践活動が出来る「持続可能な共生」としての姿こそ、これからの地域に密着して存在する浄土真宗本願寺派の僧侶の姿であり、社会実践のあり方としての道が見えてくるのである。

参考資料

- 【わが国財政が直面する経済社会構造の変化に関する研究「経済社会の基調的な変化」報告書】財務総合政策研究所 2010
 【「国土の長期展望」中間とりまとめ】国土交通省 2011
 【厚生労働白書平成23年版社会保障の検証と展望】厚生労働省 2011
 【人口統計資料集2010】国立社会保障・人口問題研究所 2010
 【出生動向基本調査2005】社会保障・人口問題研究所 2005
 【平成22年国勢調査 人口等基本集計結果】総務省 2010
 【国民生活に関する世論調査（平成22年6月調査）】内閣府 2010
 【年次経済財政報告（経済財政担当大臣報告）平成21年度経済財政白書】内閣府 2009
 【年次経済財政報告（経済財政担当大臣報告）平成21年度一危機の克服と持続的回復への展望—経済財政白書】内閣府 2009
 【国民生活基礎調査】厚生労働省 2008
 宗教学者浄土真宗本願寺派【宗法「第9回宗勢基本調査報告書」】本願寺出版社 2011
 浄土真宗本願寺派社会福祉推進協議会【浄土真宗福祉白書第10号】本派社会福祉推進協議会 2000

参考文献

- 阿満利磨『社会をつくる仏教エンゲイジド・ブッディズム』人文書院 2003
 尹靖水、近藤理恵『多様な家族時代における新しい福祉モデルの国際比較研究—若者、ひとり親家族、高齢者』学文社 2010
 大谷光真『朝には紅顔ありて』角川書店 2003
 大谷光真『愚の力』文藝春秋 2009
 大谷大学真宗総合研究所『親鸞像の再構築』筑摩書房 2011
 大峰顯『今日の宗教の可能性』本願寺出版社 1989
 岡亮二『「教行信証」口述50講—親鸞のこころをたずねて第二巻（下）』教育新潮社 1997
 梯實圓（解説）『歎異抄—現代語訳付き—』本願寺出版社 2002
 北川順也『お寺が救う無縁社会』幻冬舎ルネッサンス 2011
 北畠知量『真宗人の社会関与考』同朋仏教 2002
 孝橋正一『社会科学と現代仏教』創元社 1968

- 佐藤泰正編『社会福祉総論四訂版』学芸図書 2007
 自治体問題研究所『住民と自治 2006 No. 517・No. 518』自治体研究社 2006
 新「宗制」解説書作成委員会法制部編集『浄土真宗本願寺派「宗制」解説』本願寺出版 2008
 池田勇諦『真宗の実践』真宗大谷派宗務所出版部 2009
 高石史人『仏教福祉への視座』永田文昌堂 2005
 鶴見和子・川田侃『内発的發展論』財団法人東京大学出版社 1989
 西村七兵衛『仏教社会福祉辞典』法蔵館 2006
 朴光駿『ブッダの福祉思想「仏教的」社会福祉の源流を求めて』法蔵館 2012
 長谷川匡俊著『宗教福祉論』医歯薬出版株式会社 2002
 平野尚樹『越中念仏者の歩み』永田文昌堂 1984
 村上速水『親鸞教義とその背景』永田文昌堂 1987
 山県文治・柏女靈峰『社会福祉用語辞典』ミネルヴァ書房 2006
 吉本隆明『今に生きる親鸞』講談社 2001『月刊福祉』全国社会福祉協議会 2011

参考文献

- 池見澄隆「鎌倉仏教における慈悲行と法然の救済姿勢」『仏教福祉第』1985
 岩井勝弘「日本人の福祉観と社会保障制度の選択 仏教福祉思想と社会保障制度の親和性についての考察」『法政理論』44号(2/3) 2012
 小笠原慶彰「寺院地域福祉活動の可能性—セツルメント光徳寺善隣館の実践に学ぶ—」『真宗文化真宗文化研究所年報』17号 2008
 長上深雪「仏教社会福祉の可能性」『人間・科学・宗教 ORC研究叢書10』法蔵館 2012
 葛野洋明「安心論題の現代性」『浄土真宗総合研究』2011
 川添泰信「真宗伝道論の研究」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』40号 2011
 川又俊則「超高齢少子社会のなかの寺院—寺院を「ささえる」人びとの変動を中心に—」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第11号 2010
 久保田永俊「現代社会と寺院の関係の再構築」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』12号 2011
 信楽峻磨「親鸞における信と社会的実践」『親鸞教学』38号 1981
 膝憲之「真宗の福祉活動の一考察—親鸞思想と現代社会福祉—」『真宗学』105・106合併号 2002
 高瀬頌功「日本における社会福祉史の中の仏教者の役割」『宗教研究』84号(4) 2011
 友久久雄・打本未来・高木宣秀「浄土真宗における社会活動の基礎的研究Ⅰ—歴史・現状・課題—」『佛教文化研究所紀要』46号 2007
 広井良典「現代社会における孤独 持続可能な福祉社会とスピリチュアリティ—現代日本におけるコミュニティの諸問題—」『現代と親鸞』14号 2008
 平子泰弘「寺院と檀信徒のつながり—現状と今後—」『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』11号 2010
 深川宣暢「親鸞教学における伝道の今日的課題と可能性」『真宗学』105・106合併号 2002
 村井龍治「浄土真宗本願寺派における戦後仏教社会福祉事業—新聞掲載に見た活動実態(その1)—」『龍谷大学社会学部紀要』28号 2006
 毛利勝典「親鸞における三部経千部読誦中止の意義」『印度学仏教学研究』44号(1) 1995
 矢野秀武「宗教の社会貢献論」から「宗教研究の社会的マネジメント」論へ」『宗教と社会貢献』1号(2) 2011